比　恵　65

― 比恵遺跡群第 123 次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1202 集

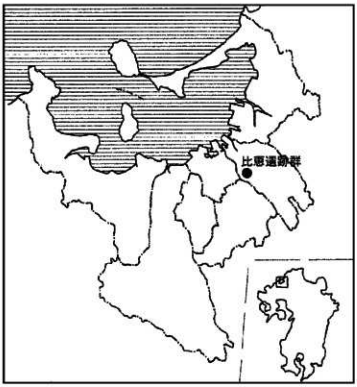
2013

福岡市教育委員会

比恵（ひえ） 65

― 比恵遺跡群第123次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1202集



調査番号　1036
遺跡略号　HIE-123

2013

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。

比恵遺跡群は奴国の拠点集落の一つとして全国的に著名な遺跡です。当遺跡が所在する博多駅南地区は博多駅周辺のオフィス街・住宅街として発展し、それに伴う開発がさかんに行われている地区です。本市では、それらの開発によってやむおえず失われる遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に先立って、平成22年度に実施した比恵遺跡群第123次調査の成果を報告するものです。調査では弥生時代中期の甕棺墓や、弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての墳墓の周溝などを検出しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、ご協力をいただきました株式会社ケイコーをはじめとした関係各位に対して、厚く感謝の意を表します。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

凡　例

(1)　本書は、福岡市教育委員会が民間の共同住宅建設に伴い、福岡市博多区博多駅南４丁目103番、103番３で平成22(2010)年度に調査を実施した比恵遺跡群第123次調査の報告書である。

(2)　発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。

(3)　遺構・遺物の実測と写真撮影は山崎龍雄、遺物の写真撮影は埋蔵文化財センター文化財専門普及員の力武卓治が行った。

(4)　鉄器の錆落しについては埋蔵文化財センター上角智希が行った。

(5)　本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。

(6)　本書に使用した方位は磁北であり、真北とは6°18′西偏する。

(7)　本書Fig.2の調査区位置図は平成５年１月作成の「福岡市文化財分布地図（中部・南部）」を使用した。

(8)　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。

(9)　SD010出土遺物の一部については埋蔵文化財調査課久住猛雄より鑑定を受けた。

(10)　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

(11)　本書の執筆・編集は山崎が行った。

調査基本情報

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	１２３次	遺跡略号	HIE－123
調査番号	１０３６	分布地図図幅名	№37東光寺	遺跡登録番号	０１２７
申請地面積	1125.35㎡	調査対象面積	３７４.００㎡	調査面積	２８５.４０㎡
調査期間	平成23（2011）年1月17日～3月2日			事前審査番号	22－2－796
調査地番	福岡市博多区博多駅南４丁目103番、103番３				

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の組織……1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境……2
Ⅲ　調査の記録……4
　1　調査の概要……4
　2　遺構と遺物……4
　　①溝状遺構……4
　　②甕棺墓……15
　　③土坑……16
　　④その他の遺構出土遺物……18
　3　まとめ……19

挿 図 目 次

Fig.1　比恵遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）……3
Fig.2　第123次調査区位置図（1 /6,000）……5
Fig.3　遺構全体図（1/200）……6
Fig.4　SD010（1/60）……7
Fig.5　SD010出土遺物Ⅰ（1/3・1/4）……9
Fig.6　SD010出土遺物Ⅱ（1/3・1/4・1/5）……10
Fig.7　SD010出土遺物Ⅲ（1/3・1/4）……11
Fig.8　SD010出土遺物Ⅳ（1/3・1/4・1/5）……12
Fig.9　SD010出土遺物Ⅴ（1/5）……13
Fig.10 SD010出土遺物Ⅵ（1/3）……14
Fig.11 ST008・SK013・014・020・034（1/30）……15
Fig.12 ST008・SK020出土遺物（1/4・1/6）……16
Fig.13 各遺構出土遺物（1/3・1/4）……17
Fig.14 各遺構出土石器・鉄器（1/1・1/4）……18
Fig.15 調査区周辺古墳周溝配置図（1/500）……20

図 版 目 次

PL.1 (1) 調査区周辺現況（南西から）……21
(2) 調査区全景（南西から）……21
PL.2 (1) 調査区全景（東から）……22
(2) 調査区南東側（北から）……22
PL.3 (1) SD010（東から）……23
(2) 同-2区下層土器群出土状況（南西から）……23
(3) 同-1区中層土器群出土状況（東から）……23
(4) 同-2区中層遺物出土状況（南西から）……23
(5) 同-3区中層遺物出土状況（南から）……23
PL.4 (1) SD010完掘（西から）……24
(2) SD010-1号土層（南西から）……24
(3) SD010-2号土層（南西から）……24
(4) ST008（北西から）……24
(5) ST008完掘（西から）……24
(6) SK013（西から）……24
(7) SK020（東から）……24
(8) SK034（西から）……24
PL.5 各遺構出土遺物……25

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

平成22(2010)年11月12日付けで株式会社ケイコーより福岡市博多区博多駅南４丁目103番、103番３における共同住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願い（事前審査番号22－２－796）が福岡市教育委員会に申請された。申請地は比恵遺跡群の遺跡範囲内に立地し、計画区域内に第16次調査区を含む範囲であり、確実に遺構があるということで確認調査はせず、その取り扱いについて申請者側と協議を行った。既に工事日程は決まっており、工事計画の変更は不可能ということから、調査費用や調査事務所などの準備を原因者負担で記録保存のための調査を行う事となった。調査対象範囲は工事計画範囲から第16次調査区を除いた部分である。本調査は平成23年１月17日から開始し、３月２日迄行った。調査実施面積は建築範囲374㎡中の285㎡である。調査報告書の作成作業は平成24年度に実施した。

調査にあたっては、申請者の株式会社ケイコー及び工事関係者の方々に多大な協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

2．調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。文化財部は平成24年４月から組織改編で経済観光文化局に移管。

調査委託	株式会社ケイコー　代表取締役　高田恵喜
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	調査時：文化財部埋蔵文化財第２課長　田中壽夫 整理時：文化財部埋蔵文化財調査課長　宮井善朗
事務担当	調査時：埋蔵文化財調査第２課調査第２係長　菅波正人 埋蔵文化財調査第１課管理係　古賀とも子 整理時：埋蔵文化財審査課管理係　古賀とも子
調査担当	埋蔵文化財第２課主任文化財主事　山崎龍雄（現　埋蔵文化財センター主任文化財主事）
調査作業	安元尚子　阿部幸子　高手與志子　保坂由美子　花田昌代　井上ヨシ子 竹原吉秋　香月隆　中山洋治朗　井上澄敏　安藤建典　河崎征治　中山竜太 中野容子　藤野雅基
整理作業	増永好美

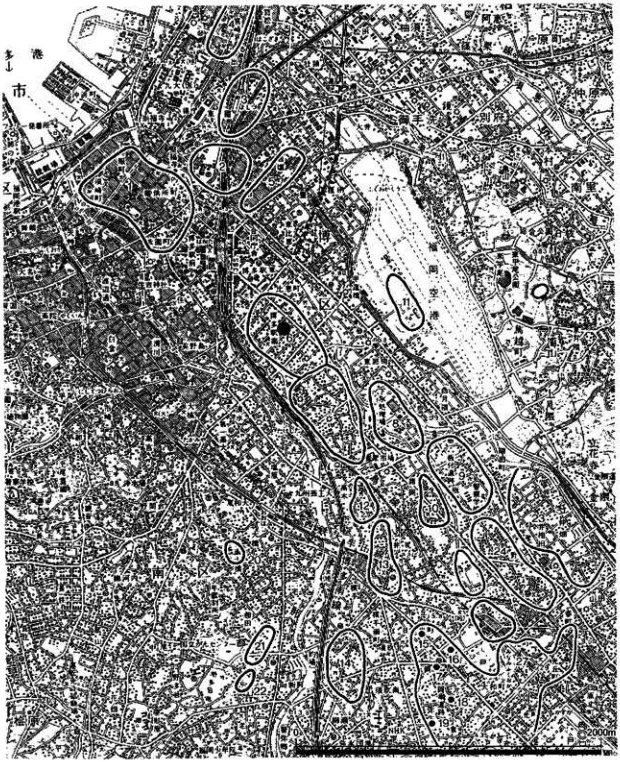
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境 (Fig.2)

立地と自然環境　比恵遺跡群が所在する福岡平野は、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は犬鳴・三郡山地に画された地域で、周辺の山地から派生して博多湾に注ぐ室見川・樋井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や諸岡台地、糟屋台地などの丘陵・台地部とによって構成される平野である。この平野はまた地域的に西から早良平野、福岡平野、糟屋平野とに細分される。ここで言う福岡平野は那珂川と御笠川、月隈丘陵に囲まれた部分をさす。

比恵遺跡群は、この狭義の福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた標高５～11ｍを測る平坦な中位段丘上に立地する遺跡である。この台地は阿蘇山起源のＡＳＯ－４火砕流によって形成されたものである。ただ現在見られる平坦な地形は昭和10年代に行われた区画整理によって削平された結果であり、本来は台地を開析する小河川が入り組んだ台地という景観を呈していたものと思われる。今回報告する第123次調査区は比恵遺跡群の中央部に位置し、同遺跡群内では古くから数多くの調査が行われている。調査区東側は1952年調査の第２次調査区、北東側は古墳の周溝や細形銅剣を副葬した甕棺墓を検出した第６次調査区、北西側には弥生時代の住居を検出した第17次・第20次調査区がある。

歴史的環境　比恵遺跡群は南側に続く那珂遺跡群と共に、北部九州を代表する弥生時代集落で、奴国の中心集落の一つである。比恵・那珂遺跡群は本来一体化してもよい遺跡群であり、両遺跡群を合わせた規模は、東西最大幅約１㎞、南北最大長2.5㎞、総面積約100ha以上を測る（註１）広大な範囲を誇る。また遺跡群は、土地区画整理事業に伴って1934～35年に、鏡山猛氏らによって最初の調査が行われるなど、学史的にも著名な遺跡である。遺跡としては旧石器時代から中世迄の複合遺跡であるが、遺跡群が大きく発展するのは弥生時代からである。弥生時代は前期初めから集落が出現するが、その範囲は遺跡の北側から西側にかけてである。中期中頃からは遺構が台地全体に広がり、中期後半以降、直線的な大溝により主要部分が区画され、後期初頭には遺跡中央部の第１次・第10次調査区に首長層の居住区と思われる方形環濠が出現する。墳墓は北側の第４次調査区や第２次・第６次調査区などで甕棺墓地が確認されている。特に第２次・第６次調査では中期の墳丘墓や甕棺墓、木棺墓などが検出され、甕棺内に細形銅剣が副葬されていた。後期末から古墳時代前期にかけては那珂・比恵遺跡を南北に貫く並列する二列の溝が確認されている。この溝は道路状遺構と考えられており、この遺構に沿って居住地区と墳墓地区が区画されている。古墳時代は南側に隣接する那珂遺跡群では、前期古墳の那珂八幡古墳や後期の剣塚古墳など大型の前方後円墳が遺存しており、比恵遺跡群内でも第６次・第36次調査で古墳の周溝などが検出されている。古代は、遺跡の北側一帯で検出されている大型建物遺構群が『日本書紀』にある「那津官家」との関連が考えられ、その重要性から平成13年に国史跡に指定されている。遺跡群の東側には大宰府から延びる古代の西海道の道路跡なども検出されている。

註１　久住猛雄「最古の都市、那珂・比恵遺跡群」『古代の福岡』2009　海鳥社



1. 博多遺跡群
2. 堅粕遺跡
3. 吉塚本町遺跡
4. 箱崎遺跡
5. 吉塚遺跡
6. 比恵遺跡群
7. 那珂遺跡群
8. 那珂君休遺跡
9. 板付遺跡
10. 諸岡遺跡
11. 雀居遺跡
12. 五十川遺跡
13. 井尻遺跡
14. 日佐遺跡
15. 須玖唐梨遺跡群
16. 須玖永田遺跡
17. 須玖岡本遺跡
18. 須玖四丁目遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 三宅廃寺
21. 野多目遺跡
22. 野多目拾石遺跡
23. 仲島遺跡
24. 麦野A遺跡

Fig. 1　比恵遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）

Ⅲ　調査の記録

1．調査の概要（Fig.1・3、PL.1・2）

本調査区は比恵遺跡群の中央部に位置する。調査区一帯は古くから調査が行われている比恵遺跡群内でも、数多く調査が行われている地区である。周辺の調査区では、東側に1952年に森貞次郎氏らによって調査された第2次調査区がある。北東側の第6次調査区では副葬された銅剣を持つ甕棺墓が出土した甕棺墓群がある。甕棺墓群は甕棺墓の集中状況から墳丘墓が存在していたと推定されている。また古墳の周溝も検出された。北西側には弥生時代中期から後期にかけての住居跡群を検出した第17次調査区や第20次調査区がある。南側には第13次調査区、南西側に第91次調査区などがある。以上のように周辺の各調査区では弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓、竪穴住居や掘立柱建物などを検出している。

調査は既設建物解体後に行い、表土除去による廃土は場内処理した。遺構面は浅い所では厚さ10cmほどの表土下で検出した。遺構面は既設建物の独立基礎とそれを繋ぐ地中梁による破壊をひどく受けており、残りは不良であった。遺構は調査区南東側ほど多く確認出来た。遺構面は明黄褐色砂質から鈍い橙色粘土（島栖ローム）である。主な検出遺構は溝状遺構1条、土坑4基、甕棺墓1基、ピット8基などである。遺構の時期としては弥生時代中期後半から古墳時代前期頃までである。出土遺物もその時期のもので、主に溝から出土した。

遺物の記述については、色調は主に外面の色調。器壁の調整については、全体に摩滅がひどく調整不明分については記述を省く。焼成については記述がないものは普通か良好。

2．遺構と遺物

①　溝状遺構（SD）

SD010（Fig.4～10・14、PL.3・4-(1)～(3)・5）

調査区東側で検出した東西方向の溝で、東側は基礎攪乱を受け不明。第16次調査で検出した**SD10**号溝の続きであるが、建物基礎でひどく破壊をうけているため、全容はつかめない。現状での確認規模は長さ9.15m、幅3.45m以上、深さ0.75mを測る。第16次調査区まで含めると約18mを測る。溝断面形は逆台形を呈す。底面は中央部がやや深くなる。溝埋土は大きく上中下3層に分かれる。上層は暗褐色から極暗褐色粘質土、中層は黒褐色粘質土で土器を多く含む。下層は褐色粘土から地山ローム粘土ブロックの混合で、下層も土器を多く含む。遺物は破片ではあるが集中しており、意識的に廃棄された状況を示す。

出土遺物　弥生時代中期の土器から古墳時代前期初め頃の土器、石器などが多量に出土した。破片が多いが、土器群として集中しており、人為的に廃棄されたものであろう。遺物は土層ベルト毎に1～4区まで分割し取り上げたので、地区毎に報告する。

1～5・32は1区出土。**1・2**は土師器。**1**は筑前型庄内甕の口縁部片。やや歪むが口径16.5cmを測る。器壁は摩滅・剥落がひどいが、胴部外面は上面が細い平行タタキ、下半はナナメハケ目、内面はヘラケズリ。色調は淡黄橙色で、胎土に赤褐色粒子を少量含む。**2**は二重口縁壺の口縁部1/8片。復元口径21.4cmを測る。口縁の屈折部にヘラ刻み目が入る。調整はやや摩滅するがヨコナデ。色調は明黄褐色で、胎土に1～2mm石英・長石粒子を多く含む。**3**～**5**は弥生時代後期終末頃の弥生土器。**3**は大型壺の頸部から胴部で、頸部に突帯が巡る。最大胴径30.8cm以上を測る。内外面粗いハケ目。色調は頸部浅黄

橙色、胴部鈍い橙色。胎土は精良。**4**は穿孔のある底部片。鉢形か。径1㎝の孔で焼成前の穿孔。色調は外面暗緑灰色、内面浅黄色。調整はナデ。胎土に金雲母少量含む。**5**は高坏脚部1/10片。復元底径16.8㎝を測る。色調は橙色で、胎土に2㎜内外石英・長石粒子を多く含む。**32**は完存の土製投弾。3.8㎝を測る。いずれも中層出土。

6～**31**・**33**は2区と1号ベルト出土。**6**は須恵器の甕口縁部1/7片。復元口径18.2㎝を測る。口縁部外面櫛描波状文。色調は暗オリーブ灰色で、胎土は精良。**7**～**17**は古墳時代前期の土師器。**7**～**9**は壺。**7**は小型丸底壺で2/3が残る。口径7.4㎝、器高10.7㎝を測る。摩滅がひどく調整は不明だが、内面胴部ヨコハケ目で底指ナデか。**8**・**9**は二重口縁壺。**8**は破片から全体復元。復元口径16.0㎝、器高21.0㎝を測る。外面黒斑がある。色調は橙色で、胎土に1㎜内外石英・長石粒子含む。**9**は口縁部が段を持って開く形態。1/5片で復元口径20.0㎝を測る。**10**・**11**は甕。**10**は庄内系甕2/3片。復元口径13.5㎝を測る。外面ヨコ並行タタキ、内面胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコハケ目。色調は灰黄褐色で黒斑あり。胎土は精良。**11**は長胴の在地系の甕。底部欠損。口径16.2㎝を測る。内外面摩滅するが、外面胴部並行タタキ痕と口縁部タテハケ目がかすかに残り、内面は胴部タテナデ上げか。色調は外面灰黄褐色で黒斑がある。胎土に石英・長石粒子多く含む。**12**・**13**は鉢。**12**は1/12片で、復元口径15.4㎝を測る。調整はナデ。色調は緑黒色で、胎土は精良。**13**は小型の鉢で口縁部は1/6欠。丸底で屈折して開く口縁を持つ。口径11.0㎝、器高5.2㎝を測る。色調は橙色で外面黒斑がある。胎土は精良。**14**・**15**は高坏脚部。**14**は脚部が膨らむ形態。**15**は小型で大きく開く脚部。円孔がある。色調は鈍い橙色で、胎土は精良。**16**・**17**は台坏鉢の脚部。**17**は脚部に円形の透かし孔が入る。**16**・**17**の色調は鈍い橙色・鈍い黄橙色で、胎土は精良。**18**～**20**は古墳時代前期初めの土師器。**18**は短頸の壺。口縁部2/3を欠く。

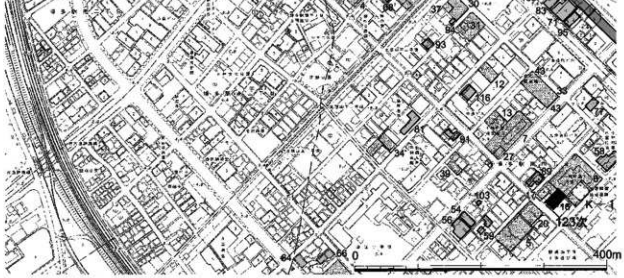


Fig.2　第123次調査区位置図（1/6,000）

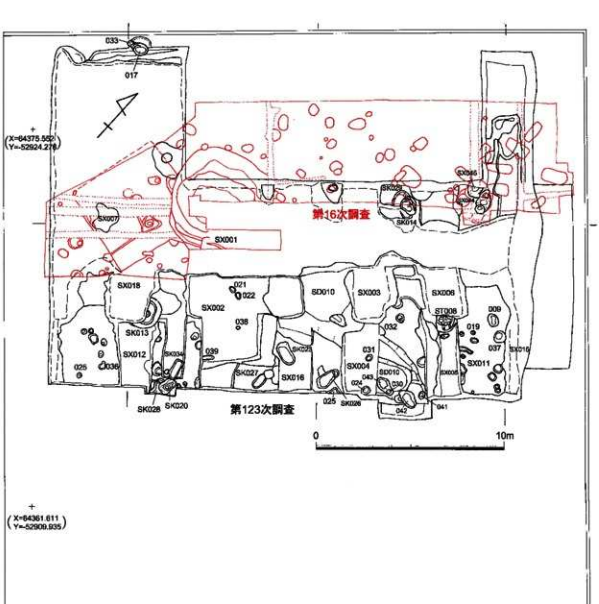


Fig. 3　遺構全体図（1/200）

復元口径 19.4 ㎝、器高 26.7 ㎝を測る。外面粗いハケ目、内面ハケ目で胴部はナデ。色調は外面浅黄色で黒斑がある。胎土に 1～2 ㎜石英・長石粒子含む。**19・20** は大型の二重口縁壺。口縁部と胴部片に分かれる。復元口径 27.0 ㎝を測る。器壁は摩滅がひどいが粗いハケ目が残る。頸部には三角突帯が巡り、黒斑がある。**20** は胴から底部片。**19** と同一個体の可能性があるが、復元図では若干異なる。歪みがあるのか。胴部下半に刻み目突帯が巡る。器壁の摩滅はひどいがハケ目調整で、胴部下半は外面板

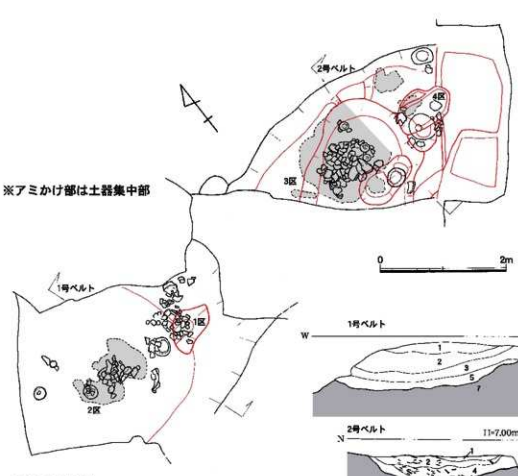


Fig. 4　SD010（1/60）

ナデか。色調は浅黄色で、胎土に２㎜内外砂粒多く含む。**21** ～ **28** は弥生土器。**21** は壺口縁部 1/8 片。復元口径 28.4 ㎝を測る。器壁は摩滅がひどいが、内面ナナメハケ目が残る。色調は鈍い橙色で、胎土に１～２㎜石英・長石粒子多く含む。焼成は不良。**22** は弥生時代中期の高坏脚部 1/8 片。復元底径 18.8 ㎝を測る。摩滅が著しいが丹塗りで、裾部にハケ目が残る。色調は橙色で、胎土に白色微粒子少量含む。**23** は僅かに屈折する口縁の鉢 1/4 片。復元口径 12.6 ㎝を測る。色調は鈍い橙色で、胎土に１～２㎜石英・長石粒子含む。**24** は器台口縁部 1/4 片。復元口径 14.4 ㎝を測る。口唇部に太いヘラか棒状の不規則な刻み目が入る。色調は浅黄色で、胎土に１㎜内外砂粒含む。**25** は台形の支脚か。1/4 片で復元底径 15.6 ㎝を測る。内面指押さえ痕が残る。色調は橙色で、胎土に最大３～４㎜石英・長石粒子多く含む。**26・27** は甕棺の破片か。**26** は須玖Ⅱ式の中型の甕棺破片。1/4 片で復元口径 45.6 ㎝を測る。胎土に１～３㎜石英・長石粒子多く含む。**27** は 1/12 片。復元口径 41.8 ㎝を測る。**26・27** の色調は淡橙色・鈍い橙色で、胎土に石英・長石、赤褐色の粗粒子を多く含む。**28** は台付鉢か甕の脚台部。外面ハケ目が残る。**29** ～ **31・33** は土製投弾。**31** は完存。全長は、**29** は 3.3 ㎝以上、**30** は 4.5 ㎝、**31** は 4.6 ㎝、

33は3.8㎝を測る。胎土はいずれも精良。2区は6・24・26が上層、12・16・17・19・20・23・28が中層、7・8・10・11・13・14・18・21・22・29・30が下層出土。1号ベルトの9・15・25・31は中層、27・33は下層出土。

34～49は3区下層出土。34は須恵器の破片。外面斜め平行タタキ、内面は凹凸の当て具痕が残る。色調は灰色で、胎土は精良。35～45は土師器でいずれも古墳時代前期初頭頃のものか。35～40は壺。35は短頸壺で口縁部と胴部片から復元。復元口径9.5㎝を測る。内外面器壁の摩滅は著しいが、外面胴部下半ナナメタタキ痕が残る。内面上半に当て具痕らしき窪みが残る。色調は鈍い橙色で、胎土は精良。36・37は二重口縁壺。36は口縁部1/4片。復元口径14.0㎝を測る。色調は灰黄褐色で、胎土に微砂粒多く含む。37は大型の壺。口縁部1/4片。復元口径27.4㎝を測る。色調は浅黄橙色で、胎土に1～2㎜石英・長石粒子を多く含む。38・39は締まり気味の頸部から口縁部が開く形態。38は各破片から復元。口径14.7㎝、復元高27.8㎝を測る。外面黒斑が2か所ある。色調は浅黄色で、胎土に1～2㎜石英・長石粒子を含む。39は38より大型。口径14.2～14.4㎝、器高33.3㎝を測る。全体に器壁は摩滅するが、頸部外面タテハケ目が残る。外底部黒斑がある。40は頸部が絞る布留式土器の壺か甕。1/6片で復元口径14.2㎝を測る。色調は黄橙色で、胎土に白色粒子を多く含む。41・42は高坏。41は坏部1/6片。復元口径19.8㎝を測る。色調は鈍い橙色で、胎土に金雲母・赤褐色粒子少量含む。42は脚部で裾を2/3欠く。復元底径14.2㎝を測る。裾部が屈折して開く形態。色調は淡橙色で、胎土は1㎜内外石英・長石粒子を含む。43は器台1/2弱片。復元口径8.7㎝、器高8.3㎝を測る。器壁は摩滅するがナデか。脚部に径0.8㎝の円孔が4か所ある。44は鉢の脚台部。復元底径8.3㎝を測る。色調は橙色を呈す。胎土に1～2㎜石英・長石粒子多く混入。45は台付鉢か高坏脚部。色調は橙色で、胎土は精良。46・47は弥生土器。46は後期の甕口縁部1/6片。復元口径15.8㎝を測る。色調は淡橙色で、胎土に1～2㎜石英・長石粒子含む。47は外来系の高坏脚部片。色調は淡黄橙色で、胎土に白色粒子多く含む。48は深い丸底の鉢1/3片。復元口径16.3㎝を測る。器壁は剥落摩滅がひどいが、外面ナデ、内面ケズリかナデ。色調は浅黄色で、外面には黒斑がある。胎土に白色微粒子少量含む。49は縦れが上部にある筒形の器台で底部欠損。復元口径10.2㎝を測る。器壁は摩滅剥落するが、内面シボリ痕が残る。色調は淡橙色で、胎土に石英・長石、雲母・赤褐色粒子を含む。

50～61は4区と2号ベルト出土。50は土師器の小型甕上部1/6片。復元口径13.8㎝を測る。外面は摩滅するが、胴部内面上半はナデとヘラケズリか。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良。51は甕口縁部2/3片。復元口径15.6㎝を測る。色調は鈍い橙色で、胎土に白色・赤褐色粒子など多く含む。焼成はやや不良。52は弥生土器甕口縁部1/5片。復元口径14.2㎝を測る。外面タテの粗いハケ目、内面は摩滅するがナデか。色調は鈍い橙色を呈し、胎土に石英・長石など粗砂粒を多く含む。53は弥生時代終末期～古墳時代初めの高坏坏部片。色調は鈍い橙色で、胎土に1㎜内石英・長石粒子を含む。54は支脚でほぼ完存。天井部径4.4㎝、器高11.6㎝を測る。全体に摩滅がひどいが、内面シボリ痕残り、ナデか。天井部沈線あり。色調は浅黄色で、胎土は1～2㎜白色砂粒少量含む。55は鍔先状口縁の高坏坏部1/4片。復元口径24.6㎝を測る。器壁には丹塗り痕残る。色調は橙色で、胎土は精良。56は甑の底部。底部には2.8×3.0㎝の円孔がある。色調は浅黄色で、胎土は精良。57は壺の頸胴部で破片から復元。復元胴径31.8㎝を測る。頸部と胴部下半に突帯が1条付く。色調は浅黄橙色で、胎土に1～2㎜石英・長石粒子を多量に含む。二次的に火を受けたのか器壁は荒れる。58は弥生時代終末期の大型の壺胴部から底部。器壁の歪みは著しい。器壁は摩滅するが内面はナデか。色調は鈍い橙色を呈し、胎土に1～2㎜石英・長石粒子を混入。59・60は弥生時代後期の甕。59は1/6片で復元口径30.8㎝を

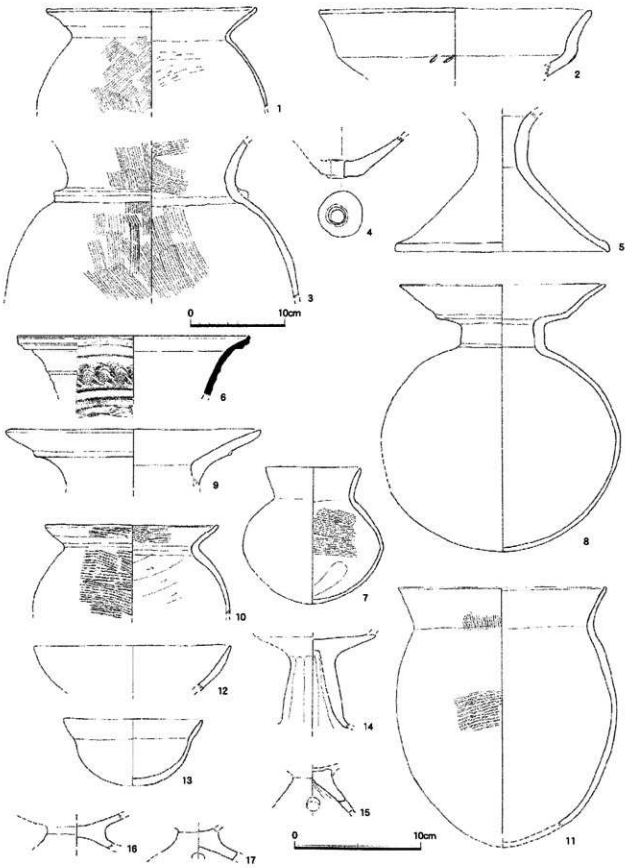


Fig.5　SD010 出土遺物 I （1/3・1/4）

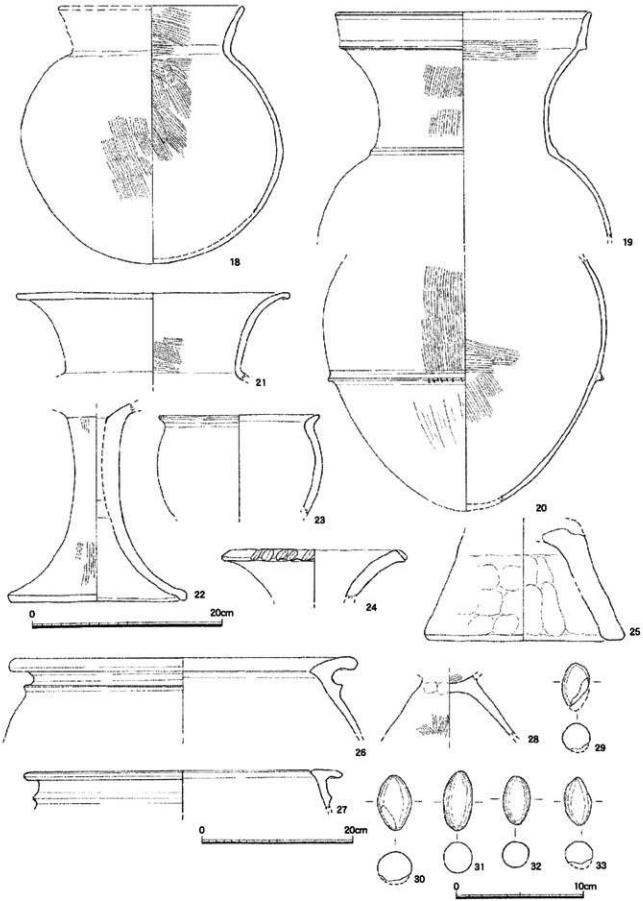


Fig.6　SD010出土遺物Ⅱ（1/3・1/4・1/5）

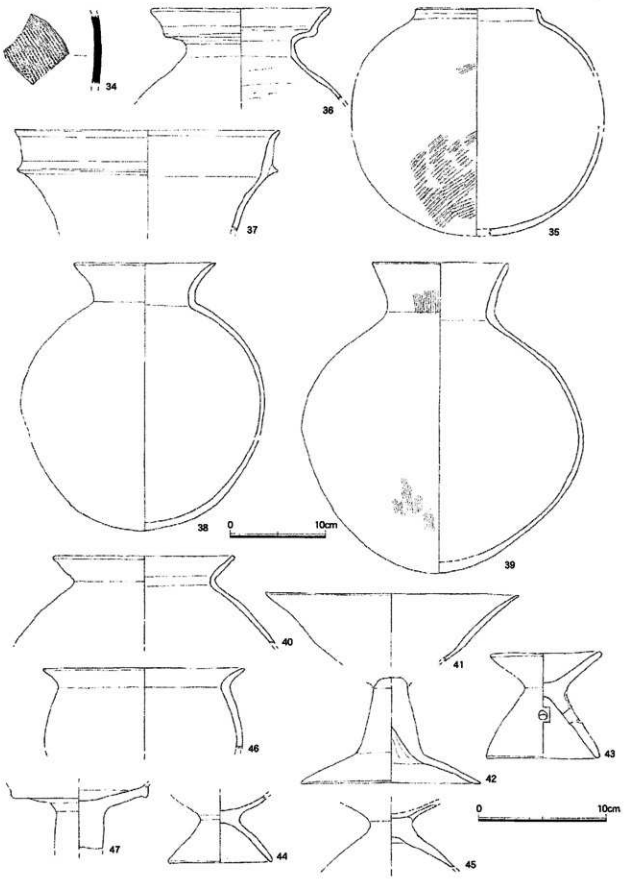


Fig.7　SD010 出土遺物Ⅲ（1/3・1/4）

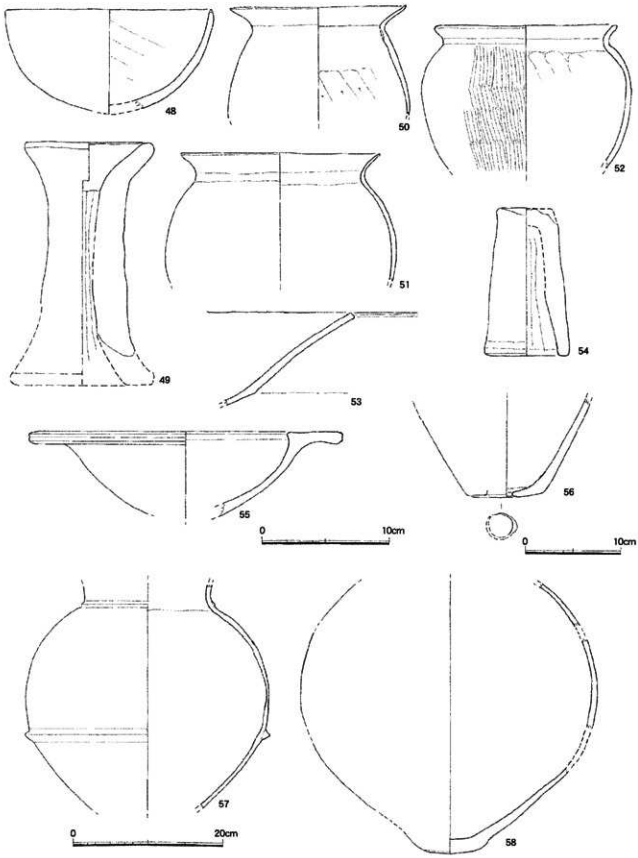


Fig.8　SD010出土遺物Ⅳ（1/3・1/4・1/5）

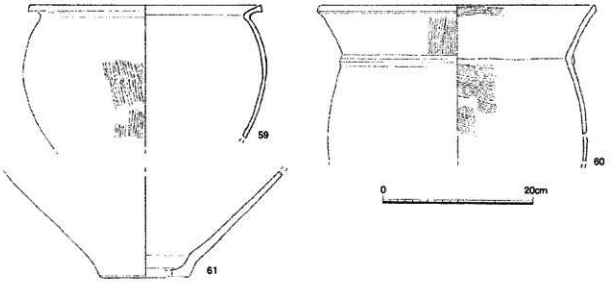


Fig.9　SD010 出土遺物Ⅴ（1/5）

測る。器壁は摩滅がひどいが、外面ハケ目が残る。色調は明赤褐色で、胎土に２～３㎜石英・長石粒子を多く含む。**60** は後期末の大型甕口縁部 1/6 片。頸部に突帯が巡る。器壁はやや摩滅するが内外面ハケ目。色調は鈍い橙色で、胎土に１～２㎜石英・長石粒子含む。**61** は壺の底部 1/6 片。復元底径 12.0 ㎝を測る。器壁は摩滅するが、胴部はナデ、外面剥落がひどい。色調は橙色で、胎土に石英・長石・赤褐色粒子多く含む。４区は **53** が上層、**57・59・61** が中層、**52・58・60** が下層出土。２号ベルトは **55** が上層、**54・56** が中層、**50・51** が下層出土。

62～73・88 は石器。**62・63** は石包丁片。**62** は残存長 4.8 ㎝。表面は丁寧な研磨。色調は褐灰色。**63** は残存長 5.4 ㎝。表面は摩滅する。色調は灰黄色。**62・63** の石材は粘板岩。**62** は２区、**63** は１号ベルト中層出土。**64** は磨製石剣の破片。残存長 6.2 ㎝で、表面は使用によるのか欠損がひどい。色調は灰色で、石材は粘板岩。２号ベルト中層出土。**65** は磨製石剣の素材の破片か。上面稜を持ち研磨。残存長 8.6 ㎝、最大幅 7.8 ㎝。色調は浅黄色で、石材は頁岩。４区中層出土。**66** は小型砥石片。残存長 6.7 ㎝、幅 3.9 ㎝。全体に摩滅がひどい。色調は黄褐色を呈し、石材は頁岩か。１区下層出土。**67～73** は敲石。**67** は砥石片再利用の敲石。残存長 9.4 ㎝、幅 7.8 ㎝。各面砥面で上下両面に使用による窪みが残る。下端も敲打使用痕が残る。色調は鈍い黄橙色で、石材は目の粗い砂岩。３区下層出土。**68** は縦長 9.0 ㎝、横幅 7.1 ㎝、最大厚 2.8 ㎝。上下両面中央に使用による窪み、側面敲打使用痕がある。石材は石英斑岩か。２号ベルト中層出土。**69** は縦長 8.8 ㎝、横幅 9.9 ㎝、最大厚 3.8 ㎝。各側面４か所に打欠きがあり、石錘に転用したと思われる。４区中層出土。**70** は磨石兼敲石。縦長 16.8 ㎝、横幅 11.5 ㎝、最大厚 6.3 ㎝。全体に軽い擦りが入り、上端・下端に使用による敲打痕が残る。色調は灰白色を呈し、石材は花崗岩質か。**71** は縦長 14.5 ㎝、横幅 8.5 ㎝、最大厚 4.4 ㎝。上面には幅広い使用による窪みがあり、各面は軽く擦られ敲打痕が残る。石材は玄武岩で、石斧片を再利用した可能性がある。**72** は縦長 13.4 ㎝、横幅 9.2 ㎝、最大幅 4.3 ㎝。**73** は縦長 8.3 ㎝、横幅 11.2 ㎝、最大厚 6.8 ㎝。いずれも上下両面使用による窪みがある。石材は、**72** は砂岩か、**73** は花崗岩質か。**70～72** は１号ベルト中層、**73** は２号ベルト中層出土。**88** は台石のようなものか。楕円形の大型の石で、縦長 29.4 ㎝、横幅 23.1 ㎝、最大厚 16.8 ㎝。表面は使用によるのか滑らかである。色調は灰色を呈す。石材は火成岩系で、表面

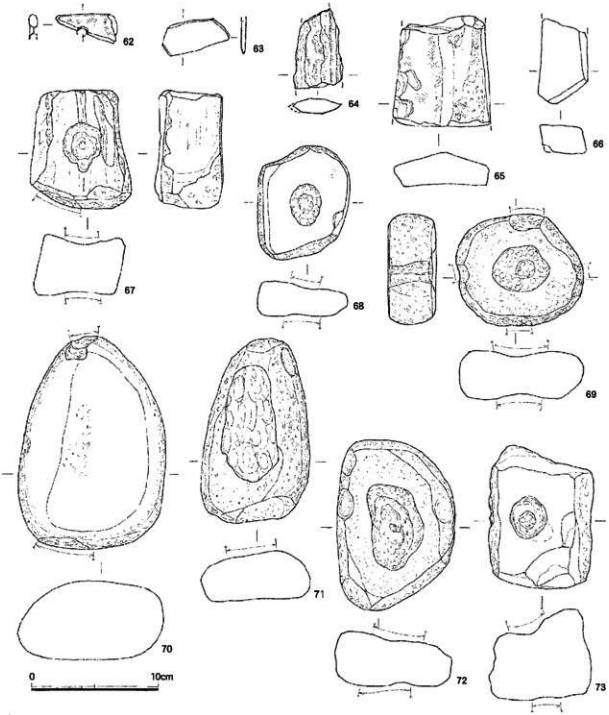


Fig.10　SD010 出土遺物VI（1/3）

には細かい孔が多数空く。2区上層出土。

89～93 は鉄製品の破片。長さは 2.4 cm・2.6 cm・2.4 cm・2.5 cm・3.1 cmを測る。表面錆が覆うが、断面はいずれも長方形状を呈す。**89～92** は釘状、**93** は鎌の茎片か。**89～91** は2区下層、**92** は1号ベルト下層、**93** は4区上層出土。

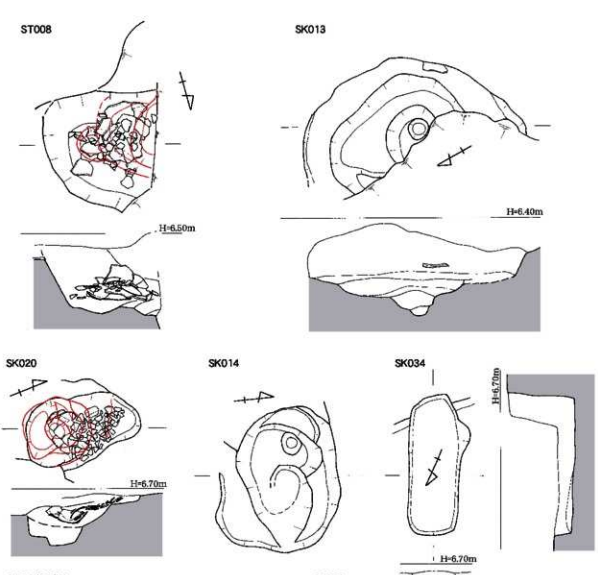


Fig.11　ST008・SK013・014・020・034（1/30）

②　甕棺墓（ST）

ST008（Fig.11・12、PL.4-(4)・(5)、5）

調査区南東側、建物地中梁基礎攪乱除去面で検出した土坑。出土した甕棺は破片で投棄されたような状況を示すので、破壊した甕棺を捨てた廃棄土坑と思われるが、甕棺があったことは確かなので甕棺墓としておく。土坑平面形は隅丸長方形を呈し、西側は基礎で破壊される。規模は縦長 0.93 m、横

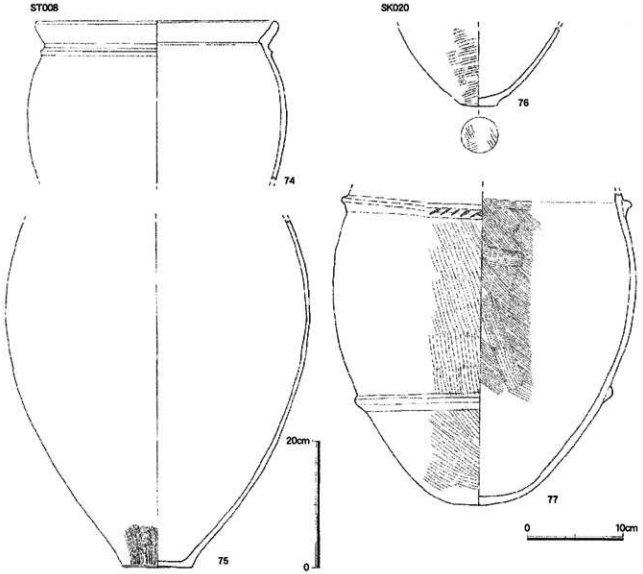


Fig.12　ST008・SK020 出土遺物（1/4・1/6）

幅 0.90 m以上、深さ 0.50 mを測る。この土坑の下部に２個体分の甕棺の破片がほぼ水平の位置で出土した。埋土は橙色ローム粘土ブロックに黒褐色粘土ブロックを少量含む。上層ではセメント塊を少量含み、上部は工事による攪乱を受けているものと思われる。**74** の甕棺は橋口達也氏編年のＫⅣ期で後期前半頃であろう。

出土遺物　74・75 は甕棺。図化して大きさが異なるので、別個体である。**74** は口縁部から胴部上半1/3 片。頸部に三角突帯が付く。復元口径 39.0 ㎝、最大胴径 41.4 ㎝を測る。器壁は摩滅するが、突帯部はヨコナデか。**75** は中型の甕棺胴部から底部。残存高 55.6 ㎝、最大胴径 48.5 ㎝を測る。器壁は摩滅があるが内外面ナデで、外面底部近くはハケ目が残る。**74・75** とも色調は橙色で、胎土に１～５㎜石英・長石・赤褐色粒子を多く含む。両甕棺は合口の甕棺であろうか。

③　土坑（SK）

SK013（Fig.11、PL.4-(6)）

調査区南西側、建物地中梁基礎攪乱除去面で検出した土坑。基礎で破壊され全体の形状は不明だが、

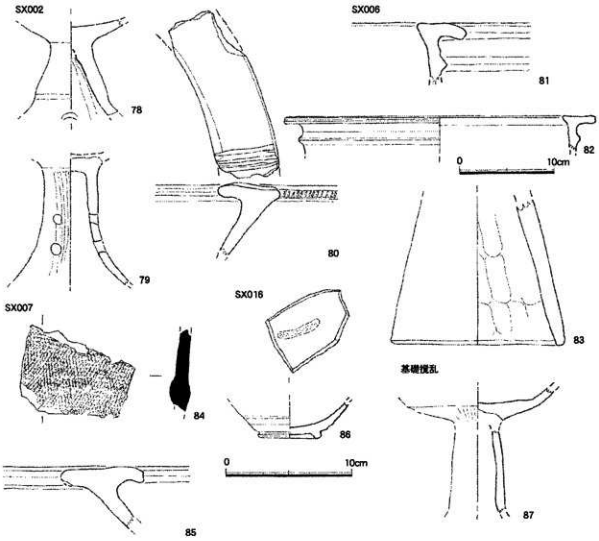


Fig.13　各遺構出土遺物（1/3・1/4）

規模は長軸長 1.73 m、短軸幅 0.85 m、最大深 0.71 mを測る。底面はピット状に深くなる。壁断面は部分的に袋状を呈し、形態から貯蔵穴と思われる。埋土は明褐色粘質土ブロックと黒褐色粘質土ブロックの混合土が水平に堆積する状況を示す。

出土遺物　弥生時代中期頃の甕や黒曜石剥片などが出土したが、いずれも細片で図示出来ない。

SK014（Fig.11）

調査区北側、第 16 次調査区内で検出した第 16 次調査の掘り残し。楕円形を呈し、規模は長軸長 1.13 m、短軸幅 0.80 m、深さ 0.50 mを測る。埋土は鈍い赤褐色粘土と黒色粘土の混合土。埋土の状況から墓壙の可能性もある。

出土遺物　弥生土器の甕・壺などの破片が出土したが、細片で図示出来ず、時期は不明。

SK020（Fig.11・12、PL.4-(7)・5）

調査区南側境界で検出した土坑。**SK020・028** と番号を付けたが、同一のものと考える。ただ、南側では円形ピットを切る。規模は長軸長 0.8 m以上、短軸幅 0.52 m、深さ 0.26 mを測る。黒褐色粘質土に橙色ロームブロックを混入する。土坑内より、破壊された状態で弥生時代終末期の甕が出土。上半は

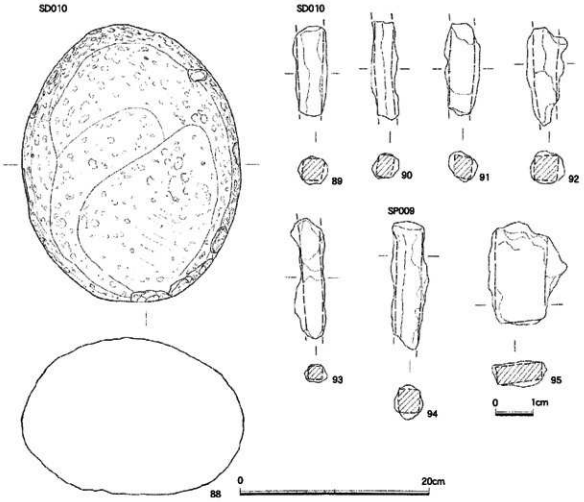


Fig.14　各遺構出土石器・鉄器（1/1・1/4）

工事で削平されたのであろう。

出土遺物　**76** は甕の底部 1/4 片。胴部外面から外底部はややナナメの並行タタキ。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は 2～3 ㎜石英・長石粒子を多く含む。**77** は丸底気味の甕胴部から底部。上半と下半に突帯が一条ずつ巡る。上部の突帯には貝殻腹縁による刻み目が付く。内外面ハケ目調整であるが、外面は粗く、内面は密である。色調は鈍い黄橙色で外面黒斑がある。胎土は 1～2 ㎜石英・長石粒子を含む。

SK034（Fig.11、PL.4-(8)）

調査区南側で検出した平面長方形を呈する土坑。規模は長軸長 1.12 m、短軸幅 0.42 m、深さ 0.50 m を測る。形態から墳墓の可能性がある。埋土は黒褐色粘質土に橙色ロームブロック混入。

出土遺物　弥生土器の細片が少量出土で図示出来ず、時期不明。

④　その他の遺構出土遺物（SX 他）(Fig.13・14)

78～80 は **SX002** 基礎攪乱出土。**78・79** は古墳時代前期の高坏の脚部。**78** は脚部裾に円孔がある。色調は鈍い橙色で、胎土は精良。**79** はミガキ調整で、上下 2 個、3 か所円孔がある。色調は鈍い黄橙

色で、胎土は１～２㎜石英・長石粒子を含む。**80**は大型の丹塗り壺口縁部小片で、口縁上面に２条の縦の突帯が付く。口唇部には刻み目を加える。**81**～**83**は**SX006**基礎撹乱出土。**81**は弥生時代中期の甕口縁部細片。色調は橙色で、胎土に２～３㎜石英・長石粒子多く含む。**82**は弥生時代中期の甕口縁1/4片。復元口径32.6㎝を測る。調整はヨコナデ。**83**は弥生時代後期の器台1/6片。復元底径13.8㎝を測る。内面は指ナデ調整か。色調は**82**が橙色、**83**は明赤褐色、いずれも胎土に１～２㎜石英・長石粒子を多く含み、**83**は赤褐色粒子も含む。**84**・**85**は**SX007**で基礎撹乱出土。**84**は陶質土器片。外面縄蓆文タタキ、内面ヨコナデ。色調は暗青灰色、胎土は精良。**85**は弥生時代中期の甕棺口縁部細片。色調は橙色で、胎土に１～２㎜石英・長石粒子含む。**86**は**SX016**基礎撹乱出土。越州窯系青磁碗底部1/3片。復元底径4.8㎝を測る。高台畳付以外施釉でオリーブ褐色を呈す。見込みに重ね焼き目跡あり。胎土は精良。**87**は基礎撹乱南西側出土。古墳時代前期の土師器の坏部と胴部片。色調は橙色、胎土は精良で微砂を少量含む。

94・**95**は鉄製品。**SP009**出土。**94**は釘状の鉄製品の一部。錆がひどいが残存長3.2㎝以上で、断面は方形か。**95**は小さな板状を呈す。残存長2.7㎝、幅2.1㎝、厚さ0.4㎝を測る。断面は長方形を呈す。

3. まとめ (Fig.15)

以上、調査の成果について述べた。ここではそれらのまとめを行う。

今回の調査で検出した遺構の時期は弥生時代中期後半から古墳時代前期までである。調査区で検出が予想された甕棺墓は、建物基礎による破壊を受けており、検出出来なかったが、甕棺破壊土坑の検出から、当調査区南東側まで存在したことは確かである。南西側まで広がるかは不明。

今回、第16次調査区で検出した古墳周溝の続きを確認したが、溝はほぼ直線的であり、南東端で丸味を持つことから、この部分がコーナー部であると思われ、方形に巡る周溝の可能性が高い。調査区の南側は未調査区であるので、今後この部分の開発には注意を要する。溝の時期は第16次調査では、古墳時代前期初頃頃に位置づけられている竪穴住居を切り、古式の須恵器の坏身が出土していることからその時期としている。本調査区では中層から下層に遺物が大量に廃棄されており、古墳時代前期初め頃などの遺物が出土しているので、新しくとも第16次調査区出土須恵器の時期までが古墳周溝の時期であろう。第６次調査の第１号古墳周溝は古墳時代後期の須恵器Ⅱ類・Ⅲ類の遺物が出土していることから古墳時代後期の時期に位置づけられ、西側隣接地の第89次調査区では直線的に続く溝を検出している。古墳であれば方形状の周溝である可能性が強い。２号墳も同様に方形墳の可能性が高く、周辺に古墳群が存在する可能性がある。一体の遺跡と考えられる那珂・比恵遺跡群では那珂遺跡群に那珂八幡古墳・剣塚古墳などの前方後円墳が現存しているが、その周辺でも方形周溝墓を初めとする古墳時代前期初めからの古墳群の存在が確認されており、それらとの関連も含め今後の周辺の調査に注意する必要がある。

参考文献

1. 福岡市教育委員会　『比恵遺跡－第６次調査・遺構編－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集　1983
2. 福岡市教育委員会　『比恵遺跡－第６次調査・遺物編－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集　1986
3. 福岡市教育委員会　『比恵遺跡群(8)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第174集　1988
4. 福岡市教育委員会　『比恵60』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1130集　2011

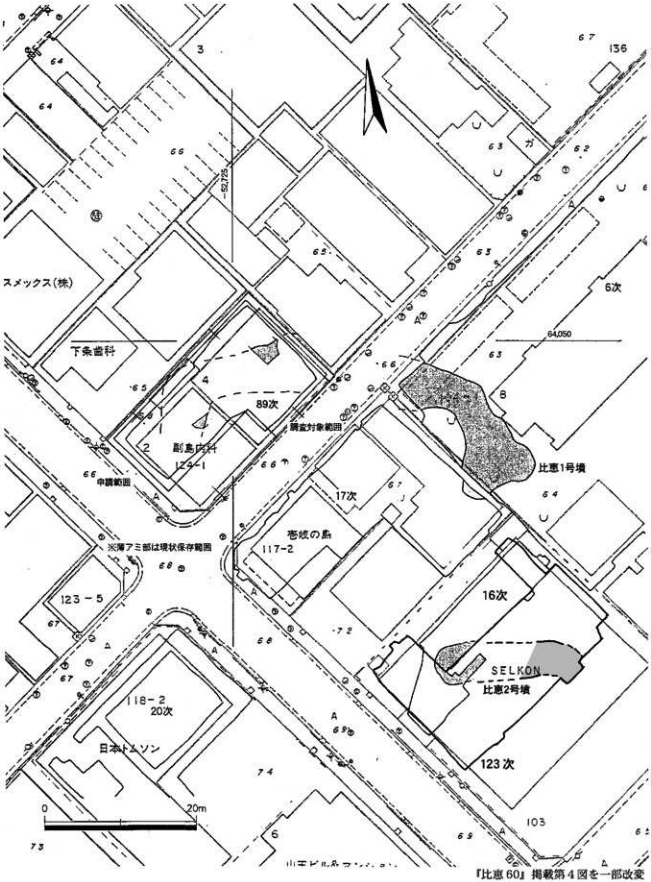
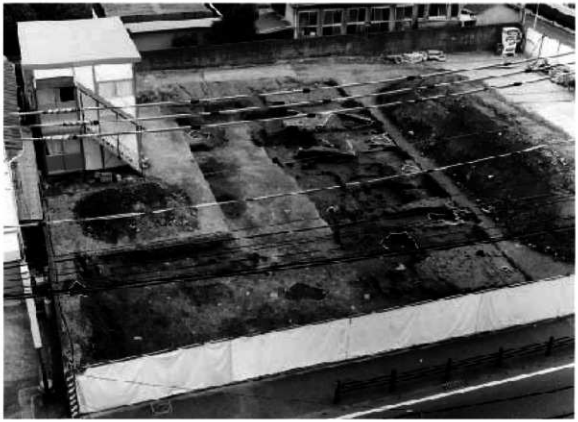


Fig.15　調査区周辺古墳周溝配置図（1/500）

(1) 調査区周辺現況（南西から）



(2) 調査区全景（南西から）

PL.2

(1) 調査区全景（東から）

(2) 調査区南東側（北から）

(1) SD010（東から）

(2) 同-2区下層土器群出土状況（南西から）

(3) 同-1区中層土器群出土状況（東から）

(4) 同-2区中層遺物出土状況（南西から）

(5) 同-3区中層遺物出土状況（南から）

PL.4

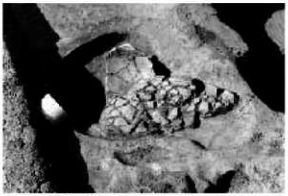
(1) SD010 完掘（西から）

(2) SD010-1 号土層（南西から）

(3) SD010-2 号土層（南西から）

(6) SK013（西から）

(4) ST008（北西から）



(7) SK020（東から）

(8) SK034（西から）

(5) ST008 完掘（西から）

SD010

7

8

11

13

18

39

58

SK020

77

ST008

74

75

各遺構出土遺物（縮尺不統一）

報告書抄録

ふりがな	ひえ
書名	比恵65
副書名	比恵遺跡群第123次調査報告
巻次	65
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1202
編著者名	山崎龍雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8-1　TEL 092-711-4667
発行年月日	西暦2013年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
比恵遺跡群 第123次調査	福岡市博多区博多駅南 4丁目103番、103番3	40130	0127	33度 34分 44秒	130度 25分 44秒	20110117 ～ 20110302	285	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群 第123次調査	集落・ 墳墓	弥生～ 古墳時代	甕棺墓・古墳周溝・土坑	弥生土器・土師器・ 甕棺	

要約	調査区は既存建物基礎による攪乱がひどく、遺構面の残りは良くなかった。遺構面が比較的残る南側で第16次調査区から続く古墳の周溝と考えられている溝を検出した。溝は比較的直線的であり、墳墓の溝とすれば、方墳または方形周溝墓の周溝の可能性がある。時期的には古墳時代前期頃か。

比 恵 65

－比恵遺跡群第123次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1202集

2013(平成25)年3月22日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
(092) 711－4667

印刷 有限会社 吉村綜合印刷
福岡市博多区博多駅前2丁目3-23
(092) 415－6135